

青年海外協力隊員として教育に携わって

— 現地での活動の成果と日本での教育実践 —

Working as a JOCV — Teaching in Zambia and impact on my career as a teacher in Japan

西 條 玉 恵

SAIJO Tamae

徳島県立城西高等学校

Tokushima Prefectural Josei High School

Abstract : In this paper, I will state my activity plan and result as a Japanese Overseas Cooperation Volunteer (JOCV) who taught math and science in Zambia for two years. This will be done by examining my activities while there and by looking at the differences between the educational state of Zambia and Japan. As well, I will describe the ways in which my experience in Zambia is being put to use in present-day Japanese education.

キーワード：青年海外協力隊，教育，ザンビア

1. 青年海外協力隊参加の動機

以前から国際理解や国際協力には興味を持っており、地域の国際交流活動推進に励んでいた。ある時 JICA からの委託を受け引き受けた「21世紀の友情計画」のホームステイプログラムを通じて、あるネパール人と出会い、後日、彼の国を訪問した際、現地での協力隊の偉大な存在を知った。「何か開発途上国のためにやってみよう。そして自分も成長したい」という気持ちになり、青年海外協力隊に応募することにした。

私は県立高校の英語教師で、自らのコミュニケーションとしての英語力の向上を目指すとともに、国際協力を体験し、外国語の授業を通して、開発途上国の状況を伝えることは、生徒たちにとって視野を広げる良い機会になると思った。教師は自らの生き方を持って生徒に将来の選択をさせる仕事だと考えている。書物を読むよりも、実際に体験したことは教師として重みのある言葉として生徒に伝わる。何か語ることができる教師でありたいと常に思っていた。派遣法を利用して、青年海外協力隊に参加できることとなった。

2. 配属先の機構及び事業の要請内容

私は、平成11年7月から平成13年の7月までの2年間、ザンビア共和国に理数科教師として派遣された。

配属先省庁は教育省（Ministry of Education）で、勤務先は東部州教育事務所のチパタデイ中高等学校（Eastern Province Education Office: Chipata Day Secondary School）であった。

JICA への要請書によると、チパタデイ中高等学校は、創立1975年の世界銀行援助による校舎の政府系全日制の男女共学校で、規模はグレード8から12（日本の中学2年生から高校3年生相当）の生徒約1200名及び教員50名程度。期待される具体的業務内容及び、求められる技術の範囲は、同僚現地教師と同様に、グレード8～12（中高校生相当）の生徒に日本の中高等学校程度の数学・理科（化学・物理）の1～2教科、週25時間程度を担当するというものであった。1授業40分で、1クラス生徒数は約50名。教科指導だけでなくとどまらず、スポーツなど課外クラブ活動への参加も求められていた。

3. 出発前に想像していた協力隊員としての活動のあり方

青年海外協力隊は、開発途上国で現地の住民と共に国の発展に貢献していくものであると派遣前訓練を通じて学んだ。上に立って何かを教え込んでいくことなく、現地の人と一緒に必要としていることを少しでも満たしていくことだと考えた。そのために少しでも現地の人の中にとけ込めるように、努力したいと思った。私の場合は新規要請だったため、理数科教師という枠にとらわれない自由な発想、現地の人と何か一緒に関わってやってみたいという思いを持っていた。まずは現地の人とたくさん知り合いになることから始めて、理数科教師としては、その学校の実情に合わせて指導法を考えたい。今までの教師経験を生かしたい。日本人の代表という気持ちで行動したい。私の日本での勤務校とザンビアでの赴任校との交流を深められるよう架け橋になりたい。生徒同士が、文通交流や写真交換などができるように努力したい。ザンビアの生徒たちに日本のことを少しでも知ってもらい、興味を持ってもらいたい。

隊員生活を送るに当たって、派遣前訓練中に学んだり、本を読んだりして、良くも悪くも自分なりにザンビアやザンビア人に対するイメージがあったのは事実である。でもあまり先入観にとらわれないようにしたい。実際自分の目で見た事柄から判断できる冷静な気持ちを持ち続けたい。また日本の文化をそのまま持ち込まないように、異文化を受け入れる体制を私の中に持っておきたい。ザンビアで生活する以上は、保健衛生や治安を考慮に入れたうえで、彼らの生活スタイルにできるだけ合わせられるように努力したい。

そんな多くの思いと期待を胸に、ザンビア共和国へと飛び立ったのである。

4. 受入国の業務水準

チパタデイ中高等学校（以下チパタデイ）では、理数科教科だけではなく、全体的に教師が不足しているのが現状だった。

仕事量の割には給料が安く、現地人の教師は能力があるにもかかわらず、一般に勤労意欲が低かった。多くの教師がよりよい待遇を求めて国外へ流出しており、教育が軽視されている現状があった。おかげで、時間外にお金を取って行う授業のアルバイトに力を入れて家計をやりくりしていた（教師のアルバイトは承認されていた）。

5. 日本の学校教育との違いの考察

仕事内容に関しては、日本の学校で教師として指導するのと同じ立場であったが、関わり方は日本での学校教

育とかなり違っていた。相違点について少し例をあげてみる。

教師は根本的には教科指導のみである。またクラス担任は、朝の出席確認だけの役割で、生徒とのつながりは薄い（いつの間にか、生徒が転校していなくなっていたりすることもある）。生徒の心の問題などにはほとんど触れず、家庭状況などは学校ではノータッチである。でも最近では少しずつカウンセリングの大切さが叫ばれてきつつある。

すべての行事や生徒会役員さえも、学校の教師側の采配で決まる。生徒が中心ではなく、教師が中心で統制を取るトップダウン方式である。学校組織では、生徒の意見を聞く場は見られない。

政府系の学校は特に、国のイベントに応じて、不規則に学校が始まったり、終わったりする（私の赴任中は、10年に一度の人口調査があり、生徒がかり出されたため、授業がずいぶんなくなった）。継続的な教科指導が難しいと言える。

これらは教育行政的側面からだが、ザンビアの国の文化的、社会的側面の要素も学校教育に大きな影響を与えているように思う。

ザンビア人全体の気質として「人（特に家族、親戚、友達）を重んじる気持ち」、「持っている者が、持っていないものに分け与える協力の精神」がある。

「家制度」が今も強く残っているこの社会では人と人の結びつきが強く「内」の人間をととても大切にする。実際私も、学校の同僚教師の一員の「内」の人間として受け入れられ、みんなとても優しく助けてくれた。いざとなったときに必要なのは「人」。「自分が苦しんだときに他の人にも助けてもらえるように、自分が助けられるときは助けてあげよう」という精神が存在している。誰かが病気になる、どここの先生が亡くなった、そんなニュースが入ると、教師は授業を中止してお見舞いやお葬式に出かける。生徒のお父さんが亡くなったときにはその学年全員が授業をやめてお葬式に参加した事もある。「教育よりも人間関係の大切さ」を感じた経験である。

分け与えの精神についてだが、ウィッチクラフト（魔術）や妬み毒殺が日常的に行われている社会で、自分一人が抜きん出ることとは「人から妬まれる」ことであり、それは「身の危険を感じる事」である。生徒たちの行動を見ていると、なけなしのお金をはたいて買ったフライドポテトなどを、横から「ちょうだい」とやってきた子に惜しげもなくあげていたり、文房具などは借りた子のほうが堂々と使っていたりする。与える者と与えられる者の図式はいつも同じだが、それに対して何の疑問も持たないのはこの社会的観念のためではないかと思われる。

学校の試験に至っては、これが悪い方に出て、問題の解けた子が周りの子に見せるといった具合である。「みんなが良くなればいい」の精神は素晴らしい面ももちろん多く含むが、競争社会で生き抜いていく強い精神力をはぐくむ点においては少しネックになっていると感じた。

このような社会観念の中で行われていたザンビアの学校教育が日本と違うのは当然だと思った。それを踏まえた上でどう教育の向上を目指すかが今後の課題である。現地の人、同僚とできるだけ交流を持ち、その国の社会や文化をより深く知ること、そしてそのなかで一人間もしくは一教師として、生徒に何を伝えたいかをしっかり持って、生徒と接して行く事が重要なのではないだろうか。

6. 活動計画

赴任当初の計画として、(1)「数学・化学の教科指導」、(2)「部活動や放課後に生徒と交流」、(3)「日本語教室の開講」、(4)「日本の生徒たちとの文通交流」、そして学校の授業外の目標として、(5)「現地の人と交流し、文化や習慣、考え方を知る」、(6)「ザンビアの教育システムを理解し、特に英語教育がどのように行われているかを研究」さらに付け加えれば、(7)「私の活動記録を日本の生徒たちにリアルタイムで伝える」、(8)「阿波踊りを広める」ことなどを考えていた。

7. 活動計画の達成度

2年間の活動を終えて、計画していた活動がどの程度達成できたかを評価すると共に、活動を進めていく上で感じたことを述べてみたい。

(1) 数学・化学の教科指導

2年間グレード10, 11の数学と化学を受け持った。赴任当初から生徒のアフリカなまりの英語の聞きとりには少し苦労したものの、大きな支障はなく授業を進めることができた。教科指導で私に望まれていた事は、それほどレベルの高いものではなく教師不足を埋める役割だった。その目的から赴任3ヶ月して生物の先生がいないということで生物も手伝う事を提案した。それほど自信はなかったが、誰もいないよりはましではないかと考え、それ以来生物も教えることになった。同僚の先生方や生徒たちには非常に感謝された。

長期のターム休みには、月曜から木曜まで朝のうち2時間ほど数学と化学の補習を希望者に対して行っていたが、毎日数十人の生徒たちの出席があった。

補習指導にあたって少し悩んだのは、同僚の先生との関係だった。安い給料での毎日の生活は大変で、昼から

や土曜、日曜にお金を取って学校で生徒を教えている教師が多かった。私だけが無料で教えるとなると生徒たちはみんな私のほうに来てしまい、同僚の先生たちから反感を買う恐れがあった。そんな縄張り争いを避けるため、長期の休みだけに限定する事にした。残念だったが、ザンビアの社会で外国人の私が一緒に働く以上、考慮せざるを得ない事だったと思っている。同僚の先生との関係も良好に活動することができた。

(2) 部活動や放課後に生徒と交流

チパタデイはその名の通り、ザンビアでは少ないデイスクールで、生徒たちは全員家から歩いての通いだった(ザンビアの多くの中・高校は全寮制だった)。授業は13時に終わる(昼からはまた別の生徒が来る)。昼ご飯を家で食べてから多くの生徒たちはまた学校に帰ってくる。部活動をしたり、さらに自主勉強をしたりしている。

放課後の生徒たちには、授業では見ることのできない表情がある。ザンビアの経済状態を人種差別の観点から語ってくれた男子生徒、女性は結婚して子供を産めばいいという社会的通念を批判して、将来社会福祉関係の仕事につくために一生懸命勉強に励んでいる女子生徒。彼らと話すことによって、さまざまな生徒たちの内面を見た気がする。

部活動にもたまに顔を出したが、授業中はさえない顔をしている生徒が得意なスポーツをしている時はいきいきとしている。校外試合にも何度か付き添ったが、応援してくれていると知るとさらに張り切る。日本の生徒もザンビアの生徒も同じだと感じた瞬間だった。

(3) 日本語教室の開講

私の国、日本について興味を持ってもらおうと、日本語クラスというよりは日本紹介をしたいと考えていた。

ザンビアで車といえば日本車、テレビでもたびたび日本について紹介されていた。生徒にとって日本は遠いけれども興味のある国であった。

クラブ活動の時間を利用して日本語クラスを進めることになった。別の学校行事があったり、生徒が忘れていたり、なかなか落ち着いて取り組むことはできなかったが、最後まで残った数人はかなり意欲的で、要望にあわせて授業の内容を組んだ。彼らは簡単な挨拶や、表現をマスターし、ひらがながスムーズに読めるところまで上達した。

もともと彼らは英語を含め、数種類の現地語をも話す。言語に対してのセンスは子供の頃から養われているが、それに加えて外国語習得に対して意欲的である大きな理由がある。

「自分たちが向上するためには、外国(先進国)から

の情報を得ることが不可欠だ。外国語を習得して、自国に外国の技術を取り入れて成長したい」という深い思いがある。この点では、日本の生徒たちの外国語学習の目的と大きく異なっている。

日本文化紹介として、緑茶と日本のお菓子を一緒に食べた。生徒たちは、緑茶に対しては最初、「葉みたいに苦い」という反応だったが、最後には砂糖なしで飲めるようになった。わずかな時間だったが、私と接する中で彼らなりに日本について学んだと確信している。異文化理解の第一歩としては成功だったと思う。

(4) 日本の生徒たちとの文通交流

ザンビアに赴任する前から、現職の教師である利点を生かして、生徒同士交流できないものかと考えていた。協力隊OVの方々にも相談しており協力していただいた。

きっかけは、私の日本での勤務先のAET（外国人英語指導助手）からのメールで、授業の一貫としてザンビアの生徒に手紙を書きたいという申し入れだった。数週間後、約80通もの手紙が私宛に送られてきた。ザンビアの生徒たちに話すと大喜びで返事を書いてくれた。日本とザンビアの同世代の生徒が、それぞれの国や興味関心のあることについて意見交換できるお手伝いができたことは、本当に良かったと思う。

その後、徳島県青年海外協力協会のホームページや県内のタウン誌に「ザンビアの生徒と文通してみませんか」という事で広報していただき、メールを通じてさらに約90名の希望者を得た。

ザンビアの生徒たちに日本にまず手紙を書いてもらうという方式をとったが、生徒たちは今すぐ書くような素振りで私のところにやって来るが、切手を買うお金がないなどの理由で結局何ヶ月も書かずじまいという状態が起こっていた。日本のほうでも、せっかくザンビアの生徒からの手紙を受け取っても返事を書かない人もいた。このプロジェクトを続けるのは、予想以上に困難だった。

それでも何人かは返事が来たと喜んで持ってきてくれた。実際のところ、何人がきちんと手紙を出して、相手もきちんと返事を出してくれて交流が続いているのかを知るのは、生徒が転校したり卒業したりで難しい状態だった。

ザンビア側の問題点は、「パンが一斤買えるほどの高価な切手代」、日本側の問題点は、「ザンビア人の手書きの英語を理解する英語力」だったようだ。

確かにこれだけ離れていて文通を続けていくのはなかなか大変だったと思うが、お互いを知りザンビア人と日本人との心の距離が少しでも縮んでいくお手伝いができていたなら幸いである。

(5) 現地の人と交流し文化や習慣を知る

私の個人的な目標は「ザンビアの文化や習慣、考え方を知る」ことだった。

ザンビアといっても広く、すべての事を知ることはできないが、とりあえず自分の赴任地である東部州のチパタに住んでいる人たち（主にンゴニ族）の考え方について知りたいと思っていた。

授業の合間には、同僚の先生と話し、特に社会の先生には気候や文化についての話をいろいろ聞いた。結婚式やお葬式にも参加して、人の結びつきの強さを肌で感じた。

文化・習慣がザンビアの社会の基盤であって、それに基づいて援助は行われるべきだとあらためて感じた。

(6) ザンビアの教育システムを理解し、特に英語教育がどのように行われているかを研究

私の職業が英語教師であるため、ザンビアでの英語教育の方法を知っておくことは、これからの私の英語授業の向上にも役立つと考えていた。自分の授業が落ち着いてきた頃から、英語の先生と連絡を取って、授業を見学させてもらっていた。

ザンビアでは英語は公用語で小学校一年生から授業として習い始めるが、それまでに簡単な挨拶程度は誰でもできる状態である。彼らに課される英語力は、きちんとした正しい英語で自分の意思を表現することである。卒業試験を見せてもらい、シラバス（指導要録）をコピーさせてもらい、授業で使う教科書を手に入れた。日本での英語教育とは目的もレベルもかなり違うことがわかった。

更に平成13年度大学入試センター試験の英語問題を生徒に受けてもらい、彼らの実力や感想をまとめた。あいにく学校がストライキに入った状態で、生徒数が少なかったのは残念だったが、希望者67人の参加を得た。

問題の説明は日本語だったため、すべて英語に変えて黒板に書いた。万全のはずだったが、生徒たちはこれまでマークシートなどという解答法を見たことがなく（ザンビアでは試験はすべて記述方式）、数字を紙に書かせたのだが、特に単語並べ替えの箇所は質問続出だった。日常的に英語を使っているため、発音やアクセントについての明確な知識がないように思われた。長文は読み慣れているはずだが、かなりの読解力が必要な質問に頭を抱えていた。

解答の後に書かせた試験に対する感想には「かなり引っかけ問題が多かった」「予想以上に難しかった」「アクセント・発音の所は全然意味が分からなかった」などがあつた。興味深かったのは、「英語の問題なのに数学の計算が絡んでる！」というコメント。確かに日本の英語の試験にはいろいろな要素が重なり合っている。主に

英文読解が中心であるザンビアの英語の試験とはかなり形式が違っていると言える。

200点満点が一人いた。そして1番のアクセント問題以外、後すべて正解で188点を取った子が続いた。平均して、得点はみんな良かったようである。

少なくともここザンビアでは、英語なくしては生活できなかった。これからも日本の学生たちに、コミュニケーションの手段としての英語を教え続けたい。

(7) 私の活動記録を日本の生徒たちにリアルタイムで伝える

先にも述べたように、ザンビアに来る前から私の勤務校や協力隊、OV会と連絡をとっていたため、交流はスムーズに進んだ。

ザンビアの印象から、ミニバスで14時間かけての赴任、ザンビアから見た日本、生徒との会話を通しての印象などさまざまな視点から、私が住んでいたチパタやそこで出会った人たちについて伝えた。それを編集して「徳島県協力隊を育てる会」ホームページに掲載していただいた。ホームページを通して新しい人たちとの出会いもあった。

東京の女子高校生からは、「ザンビアの生徒との文通交流を希望します」とのメール。あるお父様からは「うちの息子が協力隊を受けたいといっているのだが生活（治安）などについて教えていただきたい」という質問メールをいただいた。また後輩の協力隊員から「あなたのホームページに送られたメールを研修に入る前に読みました」と言われたこともある。通信メディアの偉大さを感じた。

忙しいなか私のメールを編集してホームページに掲載してくださった徳島の協力隊OV会の方々に感謝すると共に、私のリアルタイムの活動記録から、少しでも多くの人に遠いアフリカの地ザンビアを身近に感じてもらっていたなら、私のこの目的は達成されたと思う。

(8) 阿波踊りを広める

「徳島」といえば「阿波踊り」。協力隊の面接試験でも答えたが、阿波踊りを通して何らかの文化交流をしようと考えていた。

ザンビアでは、腰を左右、上下に振る「ルンバ」が一般的に受け入れられ、若者たちは「ラップ」ミュージックで踊っていた。音楽に合わせて体を動かすことが大好きだった。

ある時学校でダンス発表会が開かれることになり、この発表会に参加するためにザンビアの生徒たちを特訓することにした。徳島紹介のパンフレットとビデオを使い、阿波踊りの起源について、そして基本的な男踊り、女踊りを教え込んだ、もともと音感、リズム感のある子

達だったため、すぐにリズムをとらえて上手くなった。だが当日は酔っ払った外部の人の乱入によって、あえなく発表会は打ち切られてしまい、舞台上で踊ることはできなくなってしまった。

「阿波踊りを広める」という目的は達成できなかったが、「阿波踊りを紹介する」ことは出来たので、とりあえず満足している。

8. 全期間の協力効果

私の2年間を振りかえってみたが、1日、1日を考えれば長く、全体として見てみると短く感じられる2年間だった。私の視点から見た協力隊活動の目的と達成度は、先に述べたとおりだが、私がザンビアから得たものは、ここに書ききれない。私が現地の人に与えたものの倍以上、私は現地の人から多くのことを学んだと感じている。

現地の人たちの私に対する評価はどうだろうか。少しは彼らの役に立つことができただろうか。それは私が出会った何百人、何千人の人（同僚や生徒たち、そして町の人たちなど）がそれぞれ答えてくれることだろう。

ザンビアで私たちはあくまで「外国人」だった。それぞれの国がそれぞれ独自の文化を持っていて、そのなかで社会が組まれている。それを私たち外国人ボランティアが根本から変える事は出来ない。「この国の文化を尊重しながら、どうやって少しずつ向上させていくか。」これは大きなテーマである。

私が約2年間ザンビアの生徒のクラス担任をして教えた事は一つ「時間を守ろう」ということだった。そして2年後には少なくとも私のクラスの生徒の大部分は時間に正確になってきた。少しの滞在で変えられるものは、それぐらい小さなことなのかもしれない。その小さな変化の積み重ねが、国際協力の精神であり、成果なのだと思う。

9. 日本に帰って思うこと、そしてその経験の生かされ方

日本に帰国すると、物資が豊富で「無いこと」、すべてがスピーディーで「待つこと」を知らない世代の子供たちが待っていた。私がザンビアで経験した生活とはまた違った環境であった。それは、別の意味で大きなカルチャーショックを受けた。ザンビアで生活する以前は、普通だと思っていたことが不思議に思えることがたくさんあった。生徒たちの中に、ハングリー精神がだんだん失われているように感じた。日本の教育で私が何を伝えていくべきか、どのようにして生徒たちと向き合いこの社会で生き抜いていく強い精神力を持った生徒を育てていくべきかを考えた。

私のこの協力隊の経験が現在どう生かされているか言及してみる。

異国での生活では、文化や言葉などさまざまな障害にぶつかることがあった。そのとき、どのようにして自分の既存の価値観にとらわれることなく、現地の人とうまくコミュニケーションをとって、生活していくかを日々考えた。互いに触発されながらの毎日、私にとっても、現地の人たちにとっても大きな刺激であり、異文化を尊重し合う瞬間であった。そのときに培われた、多角的なものの見方や考え方は、日本で教師をしていく上でとても役立っている。

多様化している生徒指導の分野において、生徒が日本の規範だけにとらわれないもっと柔軟な価値観をもって、自分に自信を持って生きていけるよう指導している。それと同時に、携帯メールではカバーできない人と人の顔をつき合わせたコミュニケーションの大切さも教えている。

2年間の英語圏での生活、また英語を使った毎日の授業のおかげで、語学力がさらにアップした。ザンビアの生徒たちに理解してもらうために、私の英語も変化してアフリカなまりの英語になってしまったのは否めないが、さまざまな人種の人たちが話す英語を聞き取ることができるようになったのは大きな自信である。

英語は多くの人にとって生活の手段であり、目的ではない。重要なのはその人自身の人間性であり、それを英語で表現できる能力が必要なのである。本当の意味でのコミュニケーションとしての英語を再認識した。生徒たちにも、「英語を上手に話すこと」だけに重点を置くのではなく、「英語で何を話すのか」という点を強調している。

国際理解教育が叫ばれるようになり、英語の授業科目として、「異文化理解」や「生活英語」などを教える時代になった。毎時間いろいろな側面から外国語や、異文化を生徒たちに伝える良い機会である。「どうして英語を勉強するのか、それをどう活かしたいのか」私のこの経験が生きる場だと思っている。

「外国語教育」において、ザンビアの生徒たちの事を語る事によって、少しでも生徒たちが広い視野で物事を考える事ができるようになって欲しいと願っている。ボランティア活動としては、協力隊参加以前から活動していた。地域の国際交流活動にもより活発に参加するとともに、徳島県青年海外協力協会（協力隊OV会）活動を通じて、協力隊事業への参加推進やこれから協力隊員として活動される方へのサポートなどを行っていきたいと思っている。

協力隊に興味のある人、海外の文化、習慣を知りたいと考えている人たちのために、私の協力隊体験記を出版することにした。国際理解教育にも貢献できることを期

待している。

協力隊体験記出版にあたっては、日本人よりも外国人の友人の方が私の体験談に大きな興味を示した。「できれば英訳してほしい」そんな要望が数多くあった。

日本の協力隊（JOCV）は、アメリカのピースユースとよく比較されるが、海外でのその認知度はかなり低い。現地で私が出会った人たちには、とても評価され、感謝されているにもかかわらず、それがなかなか一般には伝わっていない現状がある。私はこの機会に日本の海外援助の一つとして、青年海外協力隊の存在を知らせるためにも、体験記を英語に翻訳して出版することを予定している。

私は、今後も機会があればいろいろな場面で、協力隊活動を通して感じたことを話し、地域の異文化理解推進に力を注ぎたいと思っている。

参考文献

西條玉恵（1999～2001）協力隊活動報告書

西條玉恵（2005）青年海外協力隊現職教員特別参加制度
担当者推進会議報告書

西條玉恵（2006）チパタでの出会いにジコモ！（文芸社）